第二講「論理」を読む　30分

次の文章は中村美知夫「動物は「他者」か、あるいは動物に「他者」はいるのか?」という文章の一節である。これを読んで、後の問いに答えなさい。

動物について他者を論じる上で問題になるのは、**誰にとっての**他者か、ということだ。他者についての議論の多くでは、人間にとっての他の人間が他者となるわけだが、そこに動物が[A]カラんでくるとき、**人間にとって**動物が他者でありうるのかという問題と、**動物にとって**同種・他種の動物(この場合ヒトも含む)が他者でありうるのかという問題の二つをひとまず区別しておくことは[ⓐ]ユウ用であろう。

もう一つ軸がある。人間にとっての他者の場合、個としての他者か集団としての他者かという区別が可能そうである。哲学における自己(自我)と他者(他我)という問題の場合、たった一人の個体が他者となりうる。一方、文化人類学などで問題となる他者は、多くの場合、自集団にとっての他集団(文化集団であれ、民族集団であれ)といった側面が強い。

まず、人間にとっての他者の条件から検討しよう。その際、他者となりうる対象に動物も含めて考えてみる。以下のⓑ括コの中のｈはhumanのｈを示す。

条件０（ｈ）．「他者とは、ｈと同種の者である（人間である）」

これは最もありふれた――ただし、ⓒ明ジ的に言われることは少ない――前提である。これを採用すると、最初から動物が排除されることになるので、ここでは検討の意味をなさない。

条件１（ｈ）．「他者とは、ｈと同様のＸを持っている者である」

「私（＝自我）」とまったく同じではないが、「私」と同じようなＸを持っている（ように見える）存在（＝他我）。Ｘには主体性・心・魂・理性・認知能力……などが入りうるだろう。Ｘは通常、内面的／心的な働きであって、「私」（ひいては人間）を特徴付けるものとされることが多い。また、Ｘは経験科学では簡単に証明できないものが多いのもミソである。この意味でも、動物は通常他者ではない（というか①議論の俎上に載らな

い）。動物にXは欠落しているか、あっても貧しいことが前提である。現代思想などで「動物」を語る際に、こうした前提はいまだに健在であるように思える。例えば、東浩紀の「動物化」とは、「間主体的な構造が消え、各人がそれぞれ欠乏・満足の回路を閉じてしまう状態の到来」を指す。つまり動物に他者はいない。

逆に動物が「Xを持っている」ことを認めれば、論理的帰結として動物は他者である。たとえば、Xに「苦痛を感じる能力」を入れて動物に権利を認めるシンガーなども（裏返しではあっても）まったくこの路線と同じである。苦痛を感じる動物（＝他者）を食うとはケシカラン！という論理になる。

この種の議論は、いわゆる自我─他我問題と密接にからんでいる。②基本的には個と個の問題であって、自立した「個」という近代西洋的発想が前提にあるように思われる。我思う故に我在り（コギト・エルゴ・スム）。「で、あんたはどう？」というわけである。

条件２（h）・「他者とは、hの属するYに属さない者である」

③これは、Yという何かの補集合である。自分たちとはけっして分かり合

えない何者か。言語を共有していなかったり、コミュニケーションの範囲外にあったりする者たち。異文化の人たち。たとえば、Yには「日本人」・「村人」などが入れられるだろう。日本人ではないガイジンや村人ではないヨソ者などが他者となる。

　コミュニケーションの範囲外とは言っても、実際には完全にコミュニケートが不能なわけではない。たとえば日本人とガイジンはコミュニケートできるし、村人とヨソ者もまたそうである。だから、正確に言えば、コミュニケーションの［B］シ方（かた）や頻度などが異なるということになりそうだ。この考え方は、「社会はコミュニケーションの激減域によって区切られる」（ウィルソン）という、社会生物学における「社会」の範囲とも類似している。

　２（h）は、１（h）と違って「私」個人にとっての他者ではなく、「我々」にとっての他者という文脈で使われる。集団があることが［ⓓ］基バンとなるのかもしれない。

　［④］この意味では、動物は他者でありうる。近年の人類学における動物論（たとえば奥野克巳ら）はこの路線にあると思われる。すなわち、人間の通常の（言語的）コミュニケーション圏外にある人間以外の存在（＝非人間）を取り上げようとしているようだ。

こうしたコミュニケーション範囲外の者たち（たとえば、古代ギリシアにおける「ヘレネー（＝ギリシア人）」に対する「バルバロス」）は、そもそも「他者」ですらなかったのかもしれない。ただし、かつて他者ですらなかった野蛮人や異人が他者にⓔ昇カクしたことを考えれば、動物は現在この段階（他者ですらない状態から他者に移行する中間段階）にあるとも言える。人間は自分自身のアイデンティティを問う際に、つねに「［Ｉ］ではない」他者を必要とするのかもしれない。

ただ、私たちは１（ｈ）に付随する「近代的な個」やその内部にある何か、そして２（ｈ）に付随する集団の全体をいちいち想定しながら他者と面しているわけではない。もっと日常にⓕソクした条件はないか。

条件３（ｈ）．⑤「他者とは、ｈと社会的にインタラクト可能な相手である」

ここには以下の二つが含まれうる。

条件３（ｈ）-１．「他者とは、実際にｈと社会的にインタラクトする（した）相手である」

条件3（h）-2.「他者とは、⑥潜在的にhと社会的にインタラクトすることが可能な相手である」

3（h）-1は現実的に観察可能なので分かりやすい。ただ、3（h）-2も必要であると思われる。実際にインタラクトしなくても他者と認める場合があるからだ。たとえば、電車の中で同席になった人と実際に話したりしなくても、その辺の石ころのように突然蹴飛ばしたりはできない。それは隣席の人もまた潜在的にインタラクト可能な相手だと認めているからである。

ひとまずこの3（h）の条件で、人間以外の存在者が人間にとって他者であるのかどうか、いくつかの例を見ていくことにしよう。

ある人がペットと遊んでいるとき、よほどのへそ曲がりでなければ、そこには社会的なインタラクションが成立していると考えるだろう。その意味では、ペットは[C]カい主にとって他者である。

同様に、猫に裸を見られて「恥ずかしい」と思ってしまったデリダにとっては、その猫もまた他者であると言うべきだろう。他者の眼差しなしに「恥ずかしい」という感覚が生じるとは考えにくい。

また、荘子（そうし）は川で魚が[D]ハねるのを見て魚の楽しみを知った。このときの

荘子にとっての魚もまた他者と呼べるのではないかと思う。通常、はねる魚とそれを見る人間との間に社会的なインタラクションが成立しているとは言わないだろう。ただ、そこで魚の楽しみを感じられたとき、荘子にとっては、魚は潜在的にインタラクト可能な相手となっている。

スーパーで買ってきたパック入りの豚肉を食べるとき、そのブタが他者として立ち現れることはまずないだろう。豚肉を食べる人はそのブタと社会的にインタラクトすることを考えもしない。これは豚肉が死物であるというだけの問題ではない。⑦<u>たとえば、息子の遺骨（これも死物である）をいまだに墓に納骨できないでいる両親にとって、その遺骨はおそらく他者である</u>。

コウモリであるとはどのようなことかを考えた※ネーゲルにとってのコウモリもまた他者ではない。彼にとってコウモリは具体的にその場にはおらず、［Ⅱ］な推論の対象でしかないからだ。

似た例だが、先述の荘子に対して、その場に一緒にいた論敵の恵子（けいし）はこう言う。「君は魚じゃないから魚の楽しみなんて分かるまい」。魚がはねるという現象は荘子にも恵子にも現れている。もし、「魚の楽しみなんて分かるまい」という言葉で恵子自身が魚とインタラクトする可能性を封じてしまっているならば、荘子と同じ場で同じ現象を前にしているにもかかわ

らず、恵子にとっての魚もまた他者とは言えないことになる。

※注　ネーゲルにとってのコウモリ……ネーゲルによれば、コウモリにとってコウモリであることがどのようなことかについて、（人間である）我々が想像しようとしても、コウモリの体験の一般的な類型を想定するのみであり、コウモリ独自の主観的な性格までは理解できない、という。

問一　傍線部A～Dのカタカナの部分を漢字で書いたとき、その偏は何か。次のイ～ヘからそれぞれ一つずつ選び、その符号を記せ（同じ符号を何回用いてもよい）。

A　カラんで　　B　シ方（かた）　　C　カい主　　D　ハねる

イ　木偏　　ロ　足偏　　ハ　食偏　　ニ　人偏
ホ　口偏　　ヘ　糸偏

問二　傍線部ⓐ〜ⓕのカタカナの部分を漢字で書いたとき、傍線部に同一の漢字を使うものを次のイ〜ホからそれぞれ一つずつ選び、その符号を記せ。

ⓐ　ユウ用

イ　座ユウの銘　　ロ　おユウ戯の時間
ハ　ユウ意差　　ニ　ユウ通をきかせる
ホ　客を勧ユウする

ⓑ　括コ

イ　コ立した生活を送る　　ロ　円コを描いて滑る
ハ　映画の回コシーンを見る　　ニ　コ上のボートに乗る
ホ　コ空を眺める

ⓒ　明ジ的

イ　順ジ説明する　　ロ　人のジ目を驚かす
ハ　議ジを進める　　ニ　原産地を表ジする
ホ　ジ石で遊ぶ

ⓓ 基バン

イ 鍵バン楽器　　ロ 不届き千バン

ハ ピアノのバン奏　　ニ 最後のバン餐

ホ 憲法のバン人

ⓔ 昇カク

イ 規カク外の商品　　ロ カク率の計算

ハ 非カク三原則　　ニ 漢字のカク数

ホ カク新的な思想

ⓕ ソクした

イ 督ソク状　　ロ 御ソク労

ハ ソク度制限　　ニ 約ソク

ホ 色ソク是空

問三　傍線部①「議論の俎上に載らない」とあるが、これはどういう意味か。最も適当なものを次のイ～ホから一つ選び、その符号を記せ。

イ　議論する機会がない　　　ロ　議論がまとまらない

ハ　はっきりと議論できない　　　ニ　議論する余地がある

ホ　議論の対象外である

問四　傍線部②「基本的には個と個の問題であって」とあるが、なぜ、そのように考えられるのか。最も適当なものを次のイ〜ホから一つ選び、その符号を記せ。

イ　条件０（h）が、自立した「個」という近代西洋的発想の成立とともに出現してきたから
ロ　条件０（h）が、哲学における自己と他者の問題を一切考慮せず、他者を規定するから
ハ　条件１（h）が、経験科学では簡単に証明できないものを基準として他者を規定するから
ニ　条件１（h）が、個としての「私」を特徴付ける内面的働きなどを基準として他者を規定するから
ホ　条件１（h）が、哲学における自己と他者の問題を一切考慮せず、他者を規定するから

問五　傍線部③「これは、Ｙという何かの補集合である」とあるが、それは何を指すか。最も適当なものを次のイ〜ホから一つ選び、その符号を記せ。

イ　ＸとＹ　　ロ　Ｘ以外　　ハ　Ｙ以外
ニ　Ｘ以外とＹ　　ホ　Ｙ

問六　傍線部④「この意味では、動物は他者でありうる」とあるが、なぜそう言えるのか。最も適当なものを次のイ～ホから一つ選び、その符号を記せ。

イ　条件２（h）による他者の規定が、言語を共有しないことを前提としているから
ロ　条件２（h）による他者の規定が、自立した個体であることを前提としているから
ハ　条件２（h）による他者の規定が、自分たちと異なることを前提としているから
ニ　条件２（h）による他者の規定が、野蛮人や異人であることを前提としているから
ホ　条件２（h）による他者の規定が、苦痛を感じる能力を持っていることを前提としているから

問七　空欄Ⅰに入ることばとして最も適当なものを次のイ～ホから一つ選び、その符号を記せ。

イ　我々　　ロ　動物　　ハ　個　　ニ　あなた　　ホ　集団

問八　傍線部⑤「他者とは、ｈと社会的にインタラクト可能な相手である」とあるが、ここで述べる「インタラクト」とはどのようなことを指すと考えられるか。最も適当なものを次のイ～ホから一つ選び、その符号を記せ。

イ　アイデンティティを確認すること　　ロ　友好関係を築くこと
ハ　存在感を示すこと　　ニ　会話すること
ホ　交感すること

問九　傍線部⑥「潜在的」の反対の意味を表わすことばとして最も適当なものを次のイ～ホから一つ選び、その符号を記せ。

イ　存在的　　ロ　内在的　　ハ　実在的
ニ　顕在的　　ホ　現在的

問十　傍線部⑦「たとえば、息子の遺骨（これも死物である）をいまだに墓に納骨できないでいる両親にとって、その遺骨はおそらく他者である」とあるが、なぜ、筆者はこの場合の「遺骨」を他者として認めるのか。最も適当なものを次のイ〜ホから一つ選び、その符号を記せ。

イ　遺骨には死者の魂が宿るものであるから
ロ　その遺骨もかつては生命体の一部であったから
ハ　日本の文化では、納骨しなければ故人は生きていると考えるから
ニ　両親がコミュニケーションの対象としてその遺骨と接しているから
ホ　両親がインタラクトの相手としてその遺骨と接しているから

問十一　空欄Ⅱに入ることばとして最も適当なものを次のイ〜ホから一つ選び、その符号を記せ。

イ　仮想的　　ロ　現実的　　ハ　物理的
ニ　直接的　　ホ　根本的

問十二　問題文の趣旨にしたがえば、「条件3（h）」はどのような基準に基づくものであると考えられるか。適当なものを次のイ～トから二つ選び、その符号を記せ。

イ　利己的な基準　　ロ　機械的な基準　　ハ　個人的な基準
ニ　動物的な基準　　ホ　主観的な基準　　へ　博愛主義的な基準
ト　客観的な基準

問十三　問題文の内容と合致するものを次のイ〜トから二つ選び、その符号を記せ。

イ　条件０（ｈ）によると、人間にとっての他者とは他の人間のことである。

ロ　条件１（ｈ）によると、野蛮人や異人は他者には属さない。

ハ　条件２（ｈ）によると、「私」個人にとっての他者としては、動物は除外される。

ニ　条件３（ｈ）によると、パック入りの豚肉は他者である。

ホ　人間にとっての他者を論じる場合、個としての他者と集団としての他者が区別できる。

ヘ　文化人類学的には、動物にとっての他者として人間が想定されうる。

ト　他者の存在のあり方は、他者が人間の場合であっても動物の場合であっても変わらない。

問一

A
B
C
D

問二

ⓐ	ⓓ
ⓑ	ⓔ
ⓒ	ⓕ

問三

問四

問五

問六

問七

問八

問九

問十

問十一

問十二

問十三

第二講 「論理」を読む　解答

問一

A	B	C	D
ヘ	ニ	ハ	ロ

問二

ⓐ	ⓑ	ⓒ	ⓓ	ⓔ	ⓕ
ハ	ロ	ニ	イ	イ	ホ

問三　ホ

問四　ニ

問五　ハ

問六	問七	問八	問九	問十	問十一	問十二
ハ	イ	ホ	ニ	ホ	イ	ハ
						ホ

問十三

イ
ホ